

「探究学習・調べる学習ひろば」参加者のコメントから_8

8月30日(土)20:30~22:00に実施された「探究学習・調べる学習ひろば」の第8回は、34名がライブ配信に参加、事後アンケートに6名が回答して下さいました。以下、抜粋引用(青文字)するとともに、簡単な回答・コメントを記します(※…片岡 / ★…山崎)。

資料置き場 @GoogleDrive

- ・配信の音声アーカイブ & 配布資料はこちら→([アーカイブ配信/資料置き場](#))
- ・清教学園の卒論テキスト、生徒作品サンプルはこちら→([探究大全基本資料](#))

今後の「大全」テーマ / 清教学園「朝の読書」導入経緯 / 朝の読書の頻度

(全体への感想) 本日もありがとうございました! 毎回30分+60分の構成でわかりやすく、あっというまの90分です。ゲストトークも構想しているとのこと、楽しみです。先日の藤田先生もそうでしたが、清教学園で働いている方(司書の方や管理職など)のお話も聞いてみたいと思いました。

あとは、探究大全とは少しずれてしまうかもしれませんが、山崎先生のSNSや講演会などの精力的な活動を見るたびに、何人いるのかと思うほどの活動量なので、仕事術的なところも気になっています。もし機会があればお聞きしてみたいです。

大全テーマは、コンピュータや芸能(アイドル研究)、医療、睡眠・心理学が気になります。

特に、心理学や睡眠は「やめとき」テーマになりやすいのではないのでしょうか? その点、やめずに続けた生徒たちの成果が気になります。

(移動図書館について) 配信の中では聞き逃してしまったのですが、以下質問です。①朝読書の時間は週に5日、とありましたが、各学年・各クラスを交互に回っていて、生徒にとってはクラスに移動図書館が回ってくるのは月1回程度、という認識であっているのでしょうか? ②本校では朝読書の時間というのがそもそも学校全体の慣習として存在していないのですが、清教学園では以前から取組として実施されていたのでしょうか? また、今、朝読書が存在していない学校で、営業活動をするとしたら、どうしますか? アドバイスをいただくとありがたいです。勤務校では、「本当はやりたいんだけどね…」といいつつ小テストを設定している先生が多く、営業がなかなか実らず苦戦しています。

(音楽について) 本棚の写真を見て、本当に探究学習と共に育った本棚・蔵書なのだ実感しました。オーディオ関連の本の充実度合が、なかなか学校図書館にはないような印象を受けました。テーマ一覧と合わせてみると、より実感します。話の中にあった、アーティスト研究の資料の難しさは、ファッションの分野でも実感することがあります。流行りのファッション(Y2Kなど)を扱うものはファッションの本には載っていないことがあり、そうすると雑誌を取り寄せることになり…と、SNS発信の流

行で、あまり論文や研究にもなっていない分野の対応が SNS のインフルエンサーの発信頼りになることを思うと、最近休刊や終刊になっている雑誌業界には何とか頑張ってもらいたい…と思っています。

(あざらし@中高一貫校司書/司書教諭/探究科教員)

※アザラシさんいつもありがとうございます。「**大全テーマは、コンピュータや芸能（アイドル研究）、医療、睡眠・心理学が気になります。**」コンピュータについては第 10 回でお話することができることになりました。ちなみに今回はアニメーション・漫画です。いずれ芸能・舞台芸術やります。からだ（医療）と心理はまとめて扱おうかな…。

移動図書館の①については山崎さんから。「**②本校では朝読書の時間というのがそもそも学校全体の慣習として存在していないのですが、清教学園では以前から取組として実施されていたのでしょうか？**また、今、朝読書が存在していない学校で、営業活動をするとしたら、どうしますか？アドバイスをいただけるとありがたいです」とのことですが、私が清教に 2007 年に来たときにはすでに朝の読書が始まりつつありました。当時の教頭（数学の先生でした）が強く推進をしていらっしゃったのをよく覚えています。やはり説得力のある管理職から提案は実現の早道かもしれません。そのあたりについては朝の読書の実現に至る実践報告がいろいろあると思います。たとえば朝の読書を支援しているトーハンのサイトには「朝の読書導入の手引き」（https://www1.e-hon.ne.jp/content/asadoku_tebiki.html）があります。朝の読書推進協議会 編『朝の読書 46 校の奇跡: 私たちはこのように朝の読書に取り組んだ』（2002, メディア・パル）なども。心配なのは朝の読書の実施校の減少です。詳しくは危機に立つ「朝の読書」…じつは年間「数千万冊」もの読書体験が失われている（飯田 一史） | 現代ビジネス | 講談社（飯田一史さんの記事）をお読みください。

★アザラシさんいつもありがとうございます。ゲスト、校内の人はすぐ誘えそうです。司書の先生に声をかけてみようかな。一方で、他校や公共の方にも出演してほしいのですが、「やりませんか」にはなかなか手を挙げてもらえないんですよ 笑 あざらしさん出演もどうでしょうか。ご検討下さい。

>山崎の働き方 んー、たくさん働いているように見えるのは、きっと Twitter の投稿頻度からそう見えるのだと思います。2 年前くらいから、自分の作文能力維持のために「毎日ひとつは投稿する」と決めました。それでそう見えるのじゃないかなあ。いまはきっちり 18 時の定時で帰っています。外部での登壇資料作成などは、さすがに早起きしてやったりしてますね。

4 年前、32 歳の時に子どもが生まれたので、それ以降はめっきり仕事を減らしました。もっとやるべきこと、やってみたいことはありますが、いまは必要最小限でやってるなあ、仕事してないなあと思っています。よく言えば、手の抜き所が分ってきたのかもしれない。

20 代の頃は、片岡先生と二人で毎日 20 時とか 21 時まで残って、残業(という名のお喋り)をしていました。それこそこの「ひろば」で題材にしている教育観や学習観の話、授業づくり、学校図書館の在り方など。いい上司・先輩に恵まれたな、と思います。そうやって刺激を受けながら、中学生向けに論文の授業を作ったり、研究発表会を立ち上げたり、あちこち研修に行って勉強したり、作文の授業を考えたり…。今はそうした 20 代の頃のはたらきに助けられている感じがあります。自分で授業作って、あれこれ考えてきた経験が、いま肩の力を抜いて働けていること、子育てや介護があってもそれなりに働ける背景にあるのかなあと。

>①朝の読書は週に5日と… 前年度までの実績では、ひとクラスに回ってくるのは年に1回です。高校生は3学年33クラスあり、1学期に全クラス回った時点で1学期終了。2学期以降は企画してませんでした。今年は2学期に1回、3学期に1回で挑戦してみるか、とスタッフで話し合っています。

「顔を知ってる」大学図書館司書に

この度は事例の共有をありがとうございました。利用者の元へ本を届ける。届けるだけでなく、本を通して会話をする。そうすることで、お互い顔が見える、話せる関係となる。図書館や司書のことを知っていると、生徒は図書館へ通ったり、レファ質問をしたりしやすくなるのではと感じました。館種は違いますが、大学図書館でも「図書館内で利用者を待ち構える」のでなく、利用者がある教室等へ出張して行ければと考えています。

(らんまる@大学図書館司書)

※らんまるさん、コメントありがとうございました。「図書館や司書のことを知っていると、生徒は図書館へ通ったり、レファ質問をしたりしやすくなる…大学図書館でも…利用者がある教室等へ出張して行ければと」。実現したらそれはステキですね。そうした例は聞いたことがないです。大学生は社会人間近ですので、けっこう食いつきはいいような予感が。実践の折は是非ともお知らせください！

私の経験した範囲ですが、大学生の多くは図書館の自分の関心のある棚に行っていればいいほうで、司書教諭課程ですら「ガイダンス以外では立ち入ったことがない」という者も。そこで、私の科目では10分類10冊を集める「ブックハンティング」を毎年やっていました。文系学生が建築に目覚めたりして、“セレンディピティ”がけっこう発揮されてたのしいです。それはそうと、私の講師のしていた大学では、表紙カバーを取っていて本棚が不愛想なこと夥しい…(‘◇’)ゞ。

★その通りと思います。特に生徒相手の学校図書館は、そうした利用者とのコミュニケーションがとりやすい点が強みだなと思います。朝読や授業の場でもそうですし、ふだんの閲覧業務でも、カウンター越しや書架でレファレンスの導入に声をかけるようにしています。大学図書館もある種、利用者が限定されるので、そうしたコミュニケーションは安全に取ることができそうですね。

ここ数年は大学図書館の方と関わることも多く、「図書館活用の高大接続」みたいなことをよく話題にします。情報活用能力みたいな部分は脇においといて、「とりあえず、図書館の人に相談してみよっかな」みたいなフランクさを持つことが大事なかもしれないなあ、いつも考えます。

意味のある読書活動？ 意味のない読書活動？

【感想です】探究のことに直接関係なくて申し訳ないですが、学校内移動図書館のお話が大変興味深かったです。朝の読書は「ただ読むだけ」「まとめや感想などアウトプットを求めない」ことが原則だと考えていますが、そんなだから先生方の中には「この時間を使ってもっと実のあることをさせたい」と感じてしまうのかなと思います。しかし清教学園では教育課程の中に探究があることで、まずは手に取ってもらいどんなテーマがどんな本になりうるのかを知ってもらって朝読が、しっかり「実のある」時

間になるのだなあ、と感じました。見せていただいた写真で、生徒さんたちが非常にいい表情をしていたのが印象的でした。「朝読なんかいらん」という先生も（あと読書中の生徒に茶々をいれる先生も）、こういう表情を見てくださればなあと思います。

(CK@学校司書モデルカリキュラム受講生・元中学司書)

※CKさん「この時間を使ってもっと実のあることをさせたい」という感覚わかります。「時間をかけて詰め込めば実のあることが身につく」と思うのですね。それってある程度まではそうなる可能性が高いのですが、問題があります。何より、こうした時間で充満すると、子どもたちが自分で“実”のあることを探せなくなる。ええ、うちの学校にもいっぱいいますよ。それは「テーマ（題材）の決まらない子どもたち」の中であれこれおしゃべりしました。何が自分にとって“実”なのかを探して試行錯誤するなかでこそ（もちろんアドバイスはしますが）、子どもは「実の探し方」を身に着けていくのです。よく「魚を与えるのではなく、魚の釣り方を教えよ」といいますが、それと一緒にですね。そもそも、どんな実（魚）を得るのかは、その子の判断です。危険でない限り拾ったり、釣ったりしたらいいんじゃないですかね。

★CKさんいつもありがとうございます。あらゆる図書館での活動は探究に繋がっていくので、今後もそうしたご感想お待ちしております。朝の読書の「読むだけ」原則も大事だなと思うんですね。何か目的になった読書は、それはそれで批判の対象にすべきと思いますし。とりわけ「読解力を身に着けるために」とか言い出したら野暮だよなあ。

ただ、そうした理由付けは、学校の先生向けの「説得力」を増します。僕らも選書しながら「進路選択に役立ちます」「国立二次試験レベルのテキスト入れときます」みたいな建前もまあよく使うんですね。そういう選書の仕方は、本来の朝読とはまた方向性が違うかもしれませんが、少なくとも目の前の生徒に選ばれ、借りられ、継続して読まれる、本との出会いのきっかけにはなっているのでいいのかなと。写真へのコメント嬉しいです。いい顔してますよね。



学校図書館経営のキモは「仕事アピール」 /

今晚もありがとうございました。感想をつらつら書きます！参加者へのコメントもいつもとても参考になっています（今回は特に選書の部分が）。また、高校での「読み」を支える活動の報告、情報の共有、毎度ながらありがとうございます。各クラスへの配架、イベント的にやるにしても労力（ブックトラックは、階を移動できるのでしょいか…。エレベーター完備なのですかね）がいることと思います。チャットにあった0→1への苦労も、実践を形で見えるようにしておくことの重要さも「わかりみが深い…（生徒から収集した表現）」お話でした。『急に具合が悪くなる』が選ばれているのを見かけたら、個人的には嬉しくなりそうだなーと。SNSで紹介されている本（『夜更かしの社会史』など）もい

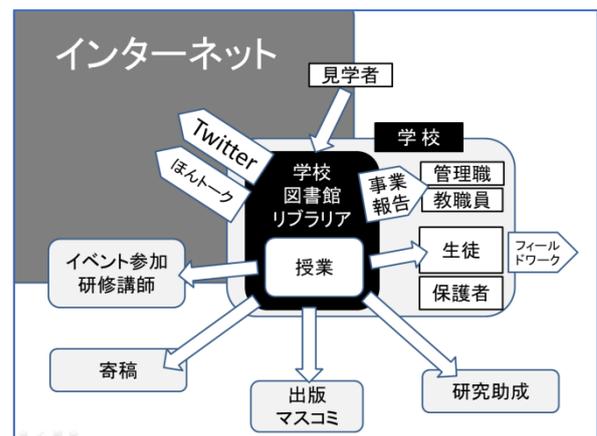
くつか所蔵しました。合わないと思ったら途中で辞めて良いことや、数珠つなぎで次の本にもつながりやすい、ってことが直接伝えやすそうなのも良いなど。あと、司書が何者かが分かれば問い合わせるハードルが下がりそうです。探究大全やコレクション画像をみせてもらって、必要な本がそろえているのか、検討材料にもなっていて助かっています(ボカロ本、ほとんど所蔵していませんでした。そりゃ音楽を選ぶ子が出てくるわけないよなーと。)

今の勤務校は生徒に増して教員が忙しそうで、そういう学校で朝読時間が持てていることが奇跡のように感じています。先生方への話も拳がっていたので、ほかに教員への働きかけがあるようなら(または、成果を引き継いだり見える化するために気をつけている点)を教えてください。(最も効果的なのは、生徒の姿勢や成果が変わることだというのは重々承知しています) 本校でもフィールドワークの準備が始まってきますが、教員からは「そもそも事前の下調べが深まっていかない、次何していいか? 質問に答えるので時間が終わってしまう」といった悩みも聞こえてきました。

次回予定の、公共図書館における夏休みの自由研究支援の話、ぜひ聞いてみたいです。出身小学校の図書館で、夏休みの講座(工作だったり実験のような体験イベントをしてくれていた)があったと記憶しています。いざ準備する側に立つと、とても贅沢なことだったと実感します。公共から学校図書館へ異動した司書の実践報告を研修で聞いた中で、企画力や人脈の広さって、教育現場ではとても生きてくるな、と強く感じたことが思い起こされました。ゲストスピーカー楽しみです。なければ、レファ協からひっぱてくるのも楽しそうですね。学校の蔵書で、この質問なら何を準備するか…以前話に出ていた、シュミレーションのような…。この取組がどれほど続くのか分かりませんが、読書会とかも面白そうだなーと思いました。本を読んだ感想は、仲間内の雑談くらいゆるくて楽しいものなのに、ビブリオバトル大会のような発表会に昇華したことで、敷居が高くなってしまったように感じるのが少し悲しくもあります。

(honobono@県立高校学校司書)

※honobono さん、「実践を形で見えるようにしておくこと」「成果を引き継いだり見える化するために気をつけている点)を教えてください」…お答えになるかどうか分かりませんが、とにかく、やったことは記録に残して発信するようにしています。校内に関しては山崎さんが書いていますし、できれば外部で何かしらの発表までしてしまうといいです。そうすると巡り巡って管理職の耳に入ったりして、それが結果として、学校図書館の条件整備や味方を増やすことにつながっていくと思います。学校図書館からの情報発信についても、改めて時間とってもいいですね。簡単にまとめると右図のようになってます。これは以前、私が書いた文書の一部。考えてみたらこの広場もこうした活動の一部ですね。

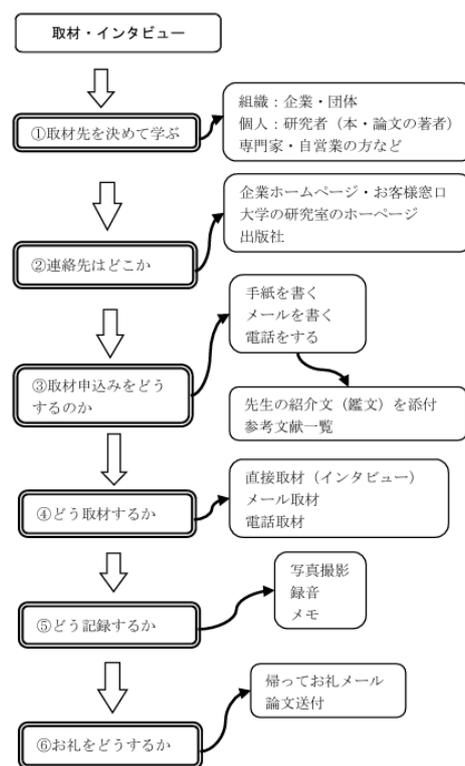


(図1)清教学園リブラリアの広報の全体像

出典:片岡則夫 (2023) 『子どもの読書を考える事典』 「本と私たちはここにいます (広報PR)」 朝倉書店

「本校でもフィールドワークの準備が始まってきますが、教員からは『そもそも事前の下調べが深まっていかない、次何していいか? 質問に答えるので時間が終わってしまう』といった悩みも聞こえてきました」。ということは…「次何していいか?」という生徒の質問に答えてしまうと、先生の授業時間が終わってしまう、ということでしょうか。フィールドワークの段取りについては、清教学園の場合はテキストに整理してあります (右図 p.77)。一応こうした段取りで各自すすめます。手間がかかるのは、③の手紙の添削です。手紙を書いて添削するなかで「事前の下調べ」が深まります。いい加減な手紙しか書けない子はフィールドに行かせません。動機や、具体的な質問 (資料を読めばわかることはNG) や、質問に対する自分なりの予想など書いていきます。言い換えると、手紙の吟味が下調べになり研究そのものの吟味になっています。

フィールドワークの話を始めると、30分では収まらないですnee。



インタビュー (取材) のステップ

★honobono さん、いつもありがとうございます。前回の選書の件、参考になってよかったです。ブックトラックの階移動、じつは結構大変なんです。エレベーターは1台ありますが、本校は「車いすでは通えない」構造なので、それなりに苦労して運んでいます…。『急に具合が悪くなる』は、朝読が始まる前に山崎が紹介しました。いい本ですよ。『なんかお勧めありますか?』と聞かれたので。借りはしなかったかな? でも、映画化もするし、どこかで思い出すかもしれないですね。あの年度は、磯野さんの本を山崎の趣味で結構入れましたね。

>合わないと思ったら… そうそう、「つまんなかったら返せばいいよ」「山崎が勧めたからって、プレッシャーに感じなくていいよ」は、いつも言ってます。人から勧められたものって、一種の呪物になるんですよ。『読まなきゃ…』みたいなプレッシャーというか。なんか文化人類学でありましたね、そういうの。山ほどあるなかの、たかが1冊の本です。分野だって、それぞれの生徒に興味関心が異なります。ヘタな鉄砲、数撃って当たればいいと思ってます。

>ほかに教員への働きかけ… 本校における朝読開始のきっかけは、あざらしさんに対する片岡先生からのコメントに詳しいのでご覧ください。どの学年が、何冊借りたか、どんな本を借りたか、といった統計データは、取り組みが終了した段階で各学年にメールで送るようにしています。今回皆さんにお見せした資料のような形ですね。そういうの、継続していけば「ああ、なんかよくわかんないけど図書館が頑張ってくれてるのね」ということで、少なくとも敵にはなりませんね (といっても、味方にもな



りません 笑)。フィールドワークの話は長くなるのでまたこんど…。30分コーナーでやりましょうか？
ちょうど本校の中3も、今年の夏に色々冒険してきました。すごい人にも会って、面白い調査もして。

>公共図書館における夏休みの… こちらの呼びかけ方が悪く、人が集まりませんでした m(__)m 次回に向けて再チャレンジします。ほかにも、色々とネタも下さってありがたいです。このひろばの終わり方もまあ考えないといけないなとは思いますが、とりあえず「探究大全」の主要テーマを終えることが目標ですね。とはいえ、学校図書館と教学・大学、もっとその先の生涯学習の現場にまで子どもの探究学習を繋いで考える意義はあると思うので、なんらかそういう場に発展していけたらとも思います。

出張図書館ぜひ挑戦してください

アーカイブで視聴させていただきました。勤務校は中高一貫校なのですが、朝読は実施されておらず、中学生のみ週1回の読書の時間があります。その時間をねらって出張図書館を実施しようと思いません。今年度後期からの実施を目指してがんばります！

また、探究学習では「音楽」をテーマに選んで苦戦する生徒が多いので、具体的なお話が盛りだくさんの番組後半も大変勉強になりました。次回も楽しみにしています。前回ちらっと話された「作家論」「作品論」をテーマにしたお話もいつかぜひお聞きしたいです。

(みかん@中学校・高等学校司書教諭・国語)

※「中学生のみ週1回の読書の時間があります。その時間をねらって出張図書館を実施しようと思いません」…素晴らしい！ぜひ挑戦してみてください。中学生にヒットする本の一覧を9回で紹介するよいてるのでご期待下さい〜。また、どんな形でも構いませんので、報告していただくと本当にありがたいです。

★みかんさん、いつもありがとうございます。どうしてもトップダウン的な動きは必要になるので、何とか管理職を狙ってみてください。本校の実践例など見せると話がまとまりやすくなるなら、ぜひご活用下さい。作家論、難しさは語れるけれど、あんまりいい事例がないのがアレですね…笑 30分枠で考えてみます。

朝読の時間の「ぼんやり」/ 探究学習と保護者

いつも有意義な時間をありがとうございます。朝読の時間における教師の言動は、生徒に大きな影響を与えていると感じました。高校生も教師の行動をよく見ているんですね。自分自身の朝読の時間の過ごし方を振り返り、反省するきっかけにもなりました。

自分の学校の朝読風景を思い浮かべると、とりあえず本を机に置いて、ぼんやりと時間が過ぎていくのを待っているだけの子ども、読んでいるフリだけの子どもがいます。そんな子どもたちにとって意味ある時間になるよう、より工夫していく必要があると感じました。

中学生の探究学習について、何度か先生方が「保護者の圧が…」というのを仰っていて、将来を考えて助言したくなる保護者の気持ち、よ〜くわかる！と思いましたが、子ども自身が自ら考え、選び、

取り組むことを応援してほしいなあ…思いました。（あれこれわが子に言いたくなる自分への戒めでもあります。）

（とかげのせびれ@小学校教諭）

※とかげのせびれさん、ありがとうございます。「本を机に置いて、ぼんやり」清教学園でもありませんねえ。対策としてこっちから本を渡せる準備をしておく朝の読書のやり方もあるかもしれません。子どもにとっては朝の読書で読む本を選ぶのが大変（学校図書館が朝開いてないとなお大変）。選んだところで、面白くなければ読まない場合も結構あると思うのです。子どもが食い付きやすい本を（読ませたい“優良図書”ではないです）用意して朝読を支援するのも選択肢かもしれません。学級文庫があるかもしれませんが問題は中身で、正直なもので「この本めっちゃええわ」という判断はすぐに子どもたちの間で広がります。実際、清教学園では出張学級文庫「すくどの本」が、そうした形で運用されています。そういえば、一部教科の先生が「読ませたい本」をこの文庫に便乗させたことがあるのです。これは案の定、読まれません。データを取ったので間違いないです（今でもあるのかな？）。

保護者の圧… うわー、また熱くなるお言葉を…(◇)ゞ。「子どもの先回りをする保護者（先生）の圧」を、先回りして牽制する必要があるのですね。以下は保護者に向けて出した文書です。「**担当教師がテーマに関して先回りや、誘導はいたしません。…同様に保護者の皆様におかれましても、生徒の主体性を尊重していただきたくお願いする次第です**」の部分がみみずです。

2022年5月

中学3年生保護者 各位

清教学園中学校 総合学習担当

卒業研究「テーマ設定」「フィールドワーク」への協力をお願い

初夏の候、保護者の皆様におかれましては益々ご隆盛のこととお慶び申し上げます。昨年9月に開始されました卒業研究「なんでやねん」の授業は、いよいよ佳境へと入ってまいりました。10月の提出までは残すところ五カ月、生徒たちは個々に研究方向を考えながら読書や演習に励んでおります。これからの論文執筆の本格化の前に、テーマ（題材）の設定とフィールドワークにつきまして、ご協力のお願いと思っております。

さて、この時期はテーマ設定が難所となります。自分なりに題材を絞り込み、一心に本を読み進める生徒もいる一方で、暗中模索が続く生徒も多くおります。こうした足踏みや方向転換は探究学習ではよくあることなので心配はしていません。むしろ、そうした行きつ戻りつがあるからこそ、手ごたえを感じられる分野と出会えると考えております。学習指導要領におきましても、総合的な学習の時間の目的の筆頭に「自ら課題を見つけ、自ら学ぶ」と示されております。したがって、担当教師がテーマに関して先回りや、誘導はいたしません。生徒自身が自分で決断して進んだり撤退する、その道のりこそ重要であると考えているからです。同様に保護者の皆様におかれましても、生徒の主体性を尊重していただきたくお願いする次第です。たとえ、選ばれたテーマが価値のない、おちゃらけた題材であったとしても、それもまた生徒の決断です。面白くない、価値がないと本人が感じるならば、引き返させるよう繰り返し指導しております。「『テーマを変えたい』はよい知らせ」と常々申しておりますので、見守っていただければ幸いです。

第二の難所は夏休みのフィールドワークです。コロナウイルスの感染次第の面もありますが、直接取材を計画します。いずれ、「フィールドワーク企画書」をご覧になるとと思いますのでご確認いただければ幸いです。ちなみに、フィールドワークにおきましては「保護者等の縁故を頼らない」、「高額な料金を伴うサービスや講座は認めない」といったルールを設けております。会いたい方には、正面から自分で扉を叩いてお会いする、そうした経験をさせたいと意図しているからです。

5月以降何かとご家庭で卒業論文が話題になることもあろうかと存じますが、何卒ご配慮ご協力をいただきたく、お願い申し上げます。

これ、ちゃんと釘を刺しておいた方がいいです。一方で、子どもにも甘えがあって、親の言いなりになりがちです。というのも、上手くいかなかったときには、「親に言われたから」という言い訳ができるからです。そんな逃げ道作ったところで、いい題材は選べません。

次ページのようなスライドを作っています。親のいいなりの「探究させられ学習」にならないように注意しよう、というわけです。探究してるふり学習はホントよくない。こうなると学ぶこと自体が目的でなくなり、学習がアリバイ作り（手段）学習、おつきあい学習になってしまいます。



問題は、こうした操り人形の糸が切れたあと（サシガネがなくなったあと）です。多くの生徒は自分がなにをしてよいかわからず、無為に時間を過ごしがちです。操り人形は糸が切れるとクテッと崩れてしまいますが、そこは人間です。時間がたつにつれて、自分への問いかけで興味が目覚め、自分が何を学ぶべきかの決断をして、学びが始まり、元気が出てくる局面が生まれす。もちろん、試行錯誤はつきものですし、最後まで上手くいかない場合もありますが。

結局のところ、探究学習は「自分の学びたいことを探して学ぶ道のり」です。言い換えれば、自分に問いかけて自由を行使して学んでみる経験なのです。これはそのままリベラルアーツ（自由になるための技術）の習得です。こうした教育観はいろんな方が語っていますが、たとえば、池上彰・上田紀行・伊藤亜紗（2021）『とがったリーダーを育てる 東工大「リベラルアーツ教育」10年の軌跡』（中公新書ラクレ）などが参考になります。

ほら、だから書きすぎてしまう…。お粗末様でした。



★とかげのせびれさん、いつもありがとうございます。ほんと、些細な言動や動きが生徒の注意をひくので(それが教員、学校の力でもありますが)、とりわけ生徒自身が自ら活動するような時間は気にした方が良いのかもしれないですね。僕も朝読中、休んでいる生徒の机上の面陳本を回収して回りますが、足音を立てないように細心の注意でやっています。

>ぼんやりと… いやあ、その気持ちもわからないでもないんです。うちの高校生にはあまり居ませんが、本校の場合、通学路の坂道をやっどこき登り切って、なんとか朝礼に間に合って、ひと息入れようにも教室のクーラーはあまり効かせてもらえず…なんて。自分だったら机に突っ伏して居るだろうなとも思います。どの生徒ものバイタルが「朝読」に適したものでないと思うんですよね。じっさい、一斉指導の難しさだと思います。

>保護者の圧… こうした家庭での語りは、生徒からよく聞くんです。「お母さんに『〇〇はやめとき』って言われて」「将来のこと考えて〇〇の方がいいんちゃうって言われて」「お父さんが『〇〇に変えるんやったら知り合いに頼んでフィールドワークさせたるわ』って言ってて」…etc. 僕も娘がいるので、4歳相手ですらもそういう親の気持ちはよくわかります。

ただ、そうした内容を教員に語れるというのも、子どもが一個の自立した人間になろうとするが故だろうなとも思います。「お母さん(お父さん)に〇〇って言われて…」と、彼らが語る先には、たいていの場合、自分でやってみたいことがあります。そして、自分で決めて進んでいくことへの不安もあります。なので、別に保護者を敵に回したいわけではないですが、「あなたがやりたいことがあるなら、別におうちの人はほっといてもいいじゃない?(知らんけど)」などと、こちらも突き放して適当なことを言います。適当ですが、そうした教員の助言から、やっぱり自分の道を選ぶという生徒、親の助言に合わせて丸く収める生徒、それぞれいます。

というか、そうやって選ぶテーマですらも、はじめから自分で意志を持って決めているわけではないんですね。探究学習におけるテーマ設定のダイナミクスはそこにあります。図書館で本と出合ったり、フィールドワークで自ら面白いことを経験する中で、偶然・たまたまの中で見つけた道が面白くなって、自分が歩んできた道だ、歩むべき道だと、自負が生まれるんですね。道なき道を行ったり来たりしながら、振り返ると自分の後ろに道がある。高村光太郎の『道程』みたいだなとも思います。

なので、保護者とのそうした葛藤は、子どもへの執着の度合にもよりますが、ふつうの事だよなとも思います。親は子離れするきっかけになればいいし、子どもは自律のきっかけになればいいんじゃないかと。双方にとっての通過儀礼なのかもしれないですね。